緑泉会

観世流

Kanzeryu Noh-Theatre　Ryokusenkai

能……巻絹 Makiginu……杉澤 陽子

狂言……八句連歌 Hachikurenga……三宅 右矩

能……自然居士 Jinenkoji……坂 真太郎

平成31年 第2回例会

4.20［土］PM 1:00～（開場12:00）

喜多六平太記念能楽堂

『自然居士』津村禮次郎（撮影：森田拾史郎）、『巻絹』津村禮次郎（撮影：前島写真店）

平成三十一年 第二回例会 番組

能 巻絹

都ノ男 河井 美紀
巫女 杉澤 陽子
臣下 村瀬 提
下人 前田 晃一

大鼓 國川 純　太鼓 梶谷 英樹
小鼓 田邊 恭資　笛 栗林 祐輔

後見 墨 敬子　津村禮次郎

地謡 筒井 陽子　吉留 敬高　中森健之介　桑田 貴志
鈴木 啓吾　中所 宜夫　中森 貫太　奥川 恒治

【休憩 十五分】

狂言 八句連歌

何某 三宅 右矩　貸主 高澤 祐介

仕舞 田村 キリ 桑田 貴志
小塩 キリ 津村禮次郎
松山鏡 奥川 恒治

地謡 新井麻衣子　中所 宜夫　中森 貫太　永島 充

【休憩 十分】

能 自然居士

女兒 坂 瞳子
自然居士 坂 真太郎
人商人 森 常好
人商人同輩 舘田 善博
雲居寺門前ノ者 三宅 近成

大鼓 柿原 弘和
小鼓 幸 正昭　笛 杉 信太朗

後見 河井 美紀　奥川 恒治

地謡 新井麻衣子　菅野 貞男　藤村 答　中森健之介
桑田 貴志　鈴木 啓吾　中所 宜夫　永島 充

附祝言

【終了予定 午後四時三十分】

許可のない録音、撮影は一切禁止です。携帯電話は電源からお切り下さい。
演能や他のお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場合によっては退場頂く事もございますのでご了承下さい。

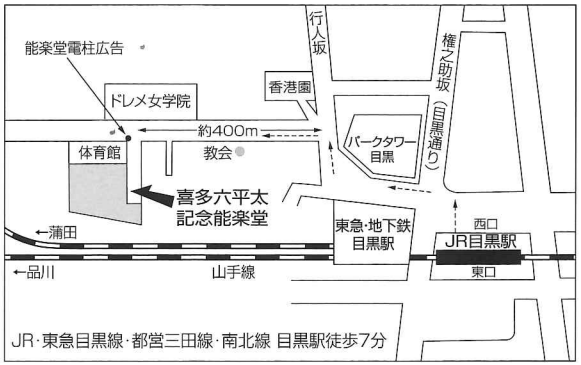
第2回例会

2019.4.20 [土] PM1:00（開場12:00）

喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021 品川区上大崎4-6-9 TEL 03-3491-8813

JR、東急目黒線、地下鉄三田線・南北線の目黒駅西口より徒歩7分。
香港園手前の道を左折し約400m直進、杉野学園体育館手前を左に入る。
※駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮下さい。



●入場料
会員券（年4回）……一般 20,000円　学生 10,000円
1回券（当日券）……一般 6,000円　学生 3,000円

●申込先：各出演能楽師または緑泉会まで
杉澤 陽子 TEL•FAX 03-6326-6645
坂 真太郎 TEL 03-3873-5404 FAX 03-3873-5635

緑泉会 〒184-0005 東京都小金井市桜町2-7-18
tel. 042-386-2131 fax. 042-386-2132

能――**巻絹**（まきぎぬ）

三熊野に巻絹千匹を奉納するよう勅使が下った。都から巻絹を運ぶ男（ツレ）は熊野までやって来たものの、先に音無天神社に詣でる。そこで梅の香に誘われて見事な花に見入り時を過すが、心中に一首の和歌を天神に捧げた。その後本宮に巻絹を献上するが、既に期限を過ぎており、勅使（ワキ）は男を咎めて縛り上げる。その時一人の巫女（シテ）が現れ、「その男は歌を詠んで私に手向けた者であるから、縄を解いて許せ」と勅使に告げる。それは巫女を通して告げられた神の言葉だった。勅使は男の身分の低さに和歌の嗜みなどあるまいと疑うが、巫女は男に歌の上の句を詠ませ、自分が下の句を継いで疑いを晴らす。男は許され、巫女は和歌の持つ功徳を曲舞に舞う。勅使は巫女に神上げを勧め、巫女は祝詞を奏上し神楽を舞う。それでも神は巫女から離れない。熊野の神々の名を一柱づつ言挙げするうちに狂乱の態となり、漸く巫女は本性に戻る。

この曲で舞われる「神楽」は、憑依している神を巫女から離すための舞で、常ならばそれでこと足りるはずが、さらに「神語り」の狂乱となる。男のために巫女に取り憑いた神は数知れず、和歌を手向けることの功徳の高さが窺われる。

狂言――**八句連歌**（はちくれんが）

男が登場し、連歌の仲間から金を借りたのだが、返せないままになっているので挨拶にと訪ねて行く。重ねての用立てかと思った貸主に追い返されてしまうが、二人を取り持ったのは連歌のやりとりだった。優雅に歌を詠み交わすうち、最後は証文を返してもらい友情に感謝する。

歌の徳を讃える狂言ならではの趣向の一曲。

仕舞――

田村（たむら）キリ…武者姿で現れた坂上田村麿。かつて、鈴鹿山の朝敵を討ち国土を安全にせよとの宣旨を受けて、軍勢を率いて観音に参り願をかけたが、その観音の仏力により、見事に凶徒を討ち果たした有様を見せる。

小塩（おしお）キリ…小塩山の麓の大原野に集う花見の人の中に、枝を折り持って一際花やかな風情の老人があり、声をかけたところが意外にも在原業平の化身だった。その夜王朝の姿で現れた業平は、花に戯れて美しく舞う。

松山鏡（まつやまかがみ）…娘のためにわずかの時間を許されて娑婆に戻った母を、倶生神（くしょうじん）は連れ戻しに来た。鏡に生前の罪を映して責めようとするが、娘の孝心により、鏡に映った母は菩薩と見紛う姿となり、倶生神は何もせずに地獄へ帰って行く。

能――**自然居士**（じねんこじ）

中世、出家せずに仏の教えを説く説教者が耳目を集めて居士と呼ばれた。自然居士（シテ）はその中でも実在を確認される一人である。その自然居士の雲居寺での説法の場で、一人の少女（子方）が小袖を代物に両親の追善を乞う。しかし人商人（ワキ）が現れ少女を連れ去ってしまい、居士は少女が親の供養のために自らを売ったのだと知る。その孝心に感じ入った居士は、説法を中断して救出に向かい、琵琶湖畔の坂本で今まさに船出しようとする船に乗り込む。商いの大法を踏まえた人商人に対し、居士は一身を捨てる気迫で道理を打ち破ろうとする。辟易した人商人は少女を返すことにするが、腹癒せに居士を恥しめようと、様々な芸能を所望する。変な烏帽子で舞わせたかと思えば短かいと文句を言い、船の起源を語りおこす曲舞で天子の船のようだとほめそやされて機嫌を直してもなお、艙を擦れ、羯鼓を打てと要求する。しかし、それに答える居士の振舞いの一つ一つがそれぞれ仏法の行となり、船は菩提の岸に着くかと見えた。すかさず少女を連れて居士は都へと帰って行く。

観阿弥作の原型が最も色濃く残ると言われる一曲で、自身亡くなる半月前に駿河國浅間神社で舞い、おそらく観阿弥最後の演目となった。

●平成31年第3回例会……9月7日（土）

能……**経正**（替之型）……津村禮次郎
能……**水無月祓**……新井麻衣子
能……**善界**（白頭）……鈴木 啓吾